【優秀賞】

「話すことは生きること」コミュニケーションによるシニアとこども両面からの少子高齢社会課題解決モデル構築

特定非営利活動法人声とことばの力

シニア・こども・大学生 様々な世代をつなぐ多世代交流の場

要旨

当法人は、シニアの方々がいつまでも健康で、生きがいに満ちた日々を過ごせるよう、朗読を活用して積極的に声を出し、認知症予防や介護・フレイル予防を行うプログラム「げんごろう式健康朗読」を開発し、活動を行っている。

急速な少子高齢化による人口減少が起こる今、少子高齢社会の課題をシニアとこども別々ではなく両面から解決し、理想的な多世代交流による地域課題解決モデルを構築するため『こども未来応援団プロジェクト』を立ち上げた。

①シニアとこどもの橋渡し役である『未来プレゼンター』の育成、②高齢者支援窓口、児童館、多世代交流施設、社会福祉協議会等と連携した活動拠点づくり、③本プロジェクトの主旨に賛同する企業や自治体とともに、各地域の課題に応じた、持続可能な多世代交流の場の創生を柱に、活動を全国に広げていく。

1.背景と目的

シニアもこどもも「話したい！」

創立より40年以上の朗読に関するノウハウを活かし、東京都健康長寿医療センター研究所「社会参加とヘルシーエイジング研究チーム」監修のもと「げんごろう式健康朗読」を開発。自治体の介護予防事業で講座を展開し、各地にシニアコミュニティを創生、のべ10万人以上のシニアと関わっている。

多くのシニアは「一人暮らしで1日誰とも話さない」「話し相手はテレビ、人と会話がしたい」と受講の理由を述べる。介護予防はこれまで運動系プログラムが中心であったが、特に大都市においては、運動したいシニアより話をしたいシニアの方が多いのだ。

そのニーズに応えたいと、講座後に朗読自主活動グループという自走式のシニアコミュニティをつくり、一部のグループは積極的に高齢者施設や児童館等への訪問も行っていた。

コロナ禍でその活動もすべて中止となり、再開の見込みが立たない中、新たな活動の場を求め、こどもの健全育成に取り組む一般社団法人ファンプレイヤーと協力して『遊びとコミュニケーションを通じた新しい多世代交流の場』を創生することとなった。

こどもの輝く未来をみんなで創る！

2021年に「親ガチャ」という衝撃的な言葉が流行語大賞に選ばれたが、こどもは親を選べず、成育環境によってその未来は大きく変化してしまう。新型コロナや社会情勢

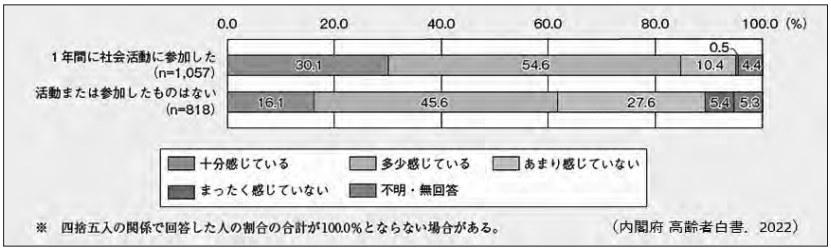
不安は家庭の経済状況をさらに悪化させ、コロナ禍の度重なる休校や交流の減少は、こどもたちの体力や精神の発達にも大きな影響を与えている。

放課後は複数の習い事で忙しく、休む間もない日々を過ごすこどもと、時間はあっても遊べる友達のいないこども。必死で経済を支えながら家事と子育てに奔走し、こどもたちにゆっくり向き合う時間がなかなか取れない親たち。そんな親たちを助け、こどもたちが自由に遊び、心に抱えた漠然とした不安を受け止めてくれる大人がいる。それが本来の地域コミュニティではないだろうか？　自分たちの孤独だけではなく、こどもたちの孤独・孤立の解消に今こそ、シニアの力が必要なのだ。

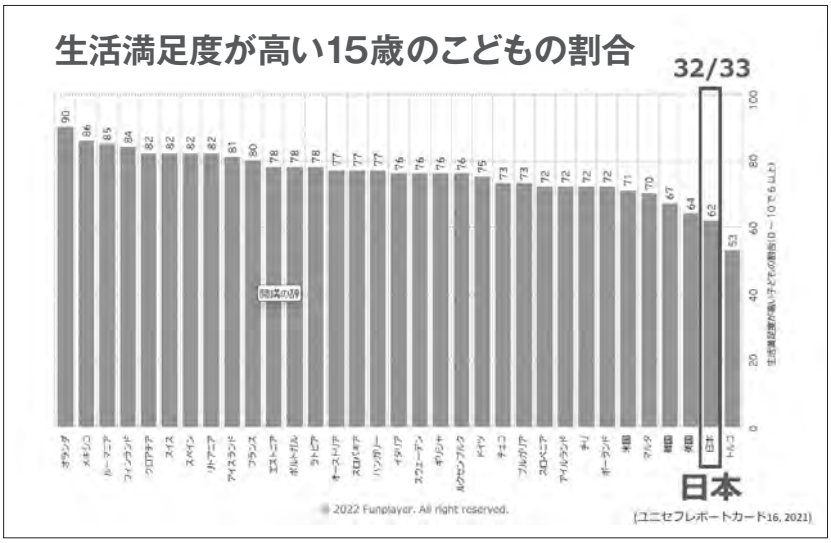
核家族化が進み、プライバシーが守られる代わりに、隣近所の付き合いはほとんどない孤立された環境で各世代が暮らしている。地震や津波、土砂崩れ、そんな災害の多い日本で、見知らぬ同士がいざ非常時に助け合い、命を守ることができるだろうか？

今や国民の3人に1人はシニアで、そのうち5人に1人は認知症罹患者と言われている。職場にいて、すぐにこどものもとへ駆けつけることができない親たちは、普段関わりのないシニアがこどもたちを助けようと声をかけても、安心して任せることができるだろうか？　有事の互助は、平時のつながりがあってこそ実現するのだ。

様々な世代が混在し、お互いに知恵を与え、手助けし、コミュニケーションが取れる持続可能な地域コミュニティの価値を再認識し、再創造することが本活動の目的である。



高齢者の社会参加と生きがいに関する資料



こどもの幸福度に関する資料

2.現状の成果・考察

「日常＆非日常」的な多世代交流の場を創生

2022～23年度、ガバメントクラウドファンディング（GCF）を活用した「すみだの夢」応援助成事業に採択されたことをきっかけに、下記4つの活動を本格的にスタートした。

【活動1】こども未来応援団の設立

50代後半のミドル世代～アクティブシニアを中心にこどもの健全育成の支援者となる「こども未来応援団員」を募集。全13名の

こども未来応援団員研修会の様子

SUMIDAこども未来応援団プロジェクトチラシ

団員に対し下記2種の研修会を実施した。

①認知症・フレイルなどシニア側の課題を紐解き、超高齢社会において最期まで自分らしく過ごすためのスキルを学ぶ研修会

②現代のこども側の課題を紐解き、遊びを通してこどもの生き抜く力を支援するスキルを学ぶ研修会

本研修により、団員としての活動が自身の健康やWell-Beingにどう役立つのか、そのWinを実感しながら高いモチベーションを保つことができた。また、現代のこどもたちの実情を知ることで、家族ではない大人だからこその寛容さで、こどもたち1人ひとりにじっくり向き合い、その話に耳を傾けることができた。

【活動2】日常的な交流の場の創生

地域の児童館や学童保育施設など、こどもたちの普段過ごす場所に、研修を受けたこども未来応援団員たちが週1回、定期的な訪問を行った。

訪問に当たり、「紙芝居」「昔遊び」など交流コンテンツをあらかじめ設定するか否かをメンバーで話し合ったが、結果的には設定しなかった。児童館ではこどもたちが自主的に遊びを展開しており、その遊びやこどもたちの関係性を中断するのではなく、あくまで一緒に遊びながら話を聞く、という姿勢で関わることで、特定の技術を持つ方だけではなく、どんなシニアでも参加ができるのではないか、という結論に至ったためである。

日常的な交流により、こどもたちはそれぞれ普段から話したいと思っていることを、思う存分シニアに話す機会が得られたばかりではなく、輪に入れずにいるこどもにシニアから声をかけ、胸の内に抱いている不安や疑問をぽつりぽつりと話している場面も印象的だった。

【活動3】シニアとこどもの橋渡し役「未来プレゼンター」の育成

多世代交流の成功には、こどもとシニアの橋渡し役となり、お互いのコミュニケーションをスムーズにするための人材「未来プレゼンター」の存在が必須である。

そこで地域活動に関心のある大学生を募集し、全17名に下記3種の研修を行った。

①少子高齢化・シニア側の課題を紐解き、シニアマーケットにおいて顧客ニーズを把握するために必要な知見を得る研修会

②こどもの健全育成に必要な地域の力について考える研修会

③少子高齢化・こども側の課題を考え、こどもの生き抜く力を引き出す研修会

日常的な交流の様子

未来プレゼンター研修風景

【活動4】非日常的な交流の場の創生

未来プレゼンターである大学生が企画・運営するシニアとこどもの交流イベントを全5回実施した。

第1回：「レゴイベント」、第2回：「手作りおまつりイベント」、第3回：「ハロウィーンイベント」、第4回：「芸術の秋イベント」、第5回：「クリスマスイベント」

延べ45名のシニア、130名のこども、48名の大学生が多世代交流に参加した。いずれもシニア・こども両者が遊び、楽しめる企画になるよう、大学生と密なコミュニケーションを行いながら実施した。

単にイベントを実施するのではなく、あらかじめシニア・こども両面の課題を応援団員、未来プレゼンターが理解してから多世代交流を行ったことで、互いを受け入れ、できないことは助け合い、共に楽しもうという本プロジェクトの目的をしっかり達成できたことが何よりの成果である。

3.今後の展望

2024年度以降は、日常と非日常を織り交ぜ、シニアとこどもが定期的に交流しながら、共に遊び、学び、イベントを自分たちで創造する活動拠点を、社会福祉協議会等と連携しながら創生する。同時に様々な世代の未来プレゼンターを育成していく。

多世代交流イベントチラシ

また、産業界の多種多様な企業と連携し、企業・シニア・こども・地域の“四方よし”の取り組みを行いながら、まず当法人の活動拠点である東京都墨田区において「SUMIDAモデル」を構築し、その後、各地域の課題に応じてカスタマイズしながら、地域のメンバーで課題解決できるようコーディネイトしていく。

将来的には、シニアのフレイル予防拠点である通いの場等を活用し、いつでもシニアのもとを訪れ、その知恵や経験を受け継ぎ、互いに学びを得ることができる、こどもの第3の居場所「シニア児童館」構築に向けた取り組みも推進したい。

PR動画1　PR動画2

多世代交流イベントの様子